



自然の 生命力

心 あ つ た か ニ ュ ー ス

NMCAA
NO3

自然の木々の生命力のすごさについて、自分が感じていたよりもっとすごいなと感じた記事がヤフリーニュースにありました。木がめつちや生える日本、森の案内人が今が有史以来、最も茂っているという理由」では、プロインタビュアー佐藤智子さんが森の案内人である三浦豊さんにインタビュウしています。三浦さんは、森を歩きはじめた15年、全国依頼があればどこへでも行く、森のガイドツアーをしています。その始まりは、下を向いたら、何気なく見ているところに、結構、東京には植物があるなあと考えて、そのままにしておけば、どういうふうになるかと予想できるようになったそうです。三浦さんの森感は、基本的には、木がいつぱい生えているところ。森は盛りを語源としていて、木々が盛り上がるように生い茂っている状態。人が木を植えなくても自然に。対して林は生やすが語源で、人が特定の場所に特定の種類の木が

生えるように手を加えたもの」だそうです。そして今木が生えていることに関して「日本でいえば、もれなく生えています」と。薪や炭からエネルギー革命で木を伐らなくなつたからだそうです。

「都会でもどんどん芽吹いていて、有史以来の茂り具合ですが、そこに人は興味がない。おかげで、自由に生える状態になった」と。木にとつて今がベストな環境と思っていた三浦さんは最近見方が変わったそうです。「木はどんな状況でもベストを尽くす。切られたら、アンハッピーで落ち込むとか、我々の喜怒哀楽というのではなく、ブレずに生きているな気がもしてきました。」佐藤智子さんの、森の案内人として何を伝えたいですか？という質問に「どの詰まりが、生きている肯定感ですかね。生きているという圧倒的なこと、かけがえのなさだと思えます。それに死してなお、養分になりますよね。森は生だらけですけれども、死ぬもいつぱいあるんですよね。木の赤ちゃんやんは森の中では基本死ぬんですよ。種から芽吹く時点で、種で菌でもやられますし、たまたま生き残ったやつが生きていくという中で、膨大な死を感じるんですよね。」

木が生きている姿から、僕たちも生きているというところに、向き合える肯定感。僕は「はみんな生きている」っていう歌みたいにかつた。悲しいこともありますが、ひつくるめでOKという」

編集後記

都会のなかの生と死

そして、その生命力。人の緑が減ったという目線から、木が持つ、生命力は人間が頭で考えることをずっと超えるものだったことに、尊敬とよかつたといううれしさもあります。生きて今いることは、考えるよりもずっとパワーがあつて、生命は強いのだと思えました。